The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	地域住民の宗教教団施設をめぐる意識構造 ： 「教団イメージ」を中心に
Author(s)	松谷, 満
Citation	年報人間科学. 2003, 24-2, p. 289-307
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6082
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

地域住民の宗教教団施設をめぐる意識構造

――「教団イメージ」を中心に――

松谷　満

〈要旨〉

本論の目的は、地域住民の宗教教団施設をめぐる意識構造を実証的に明らかにすることにある。具体的には、高槻市の真如苑教団施設周辺の地域住民に実施した二回の調査について、分析を行なった。具体的には、真如苑はどの程度認知されており、どのようなイメージをもたれているのか、教団施設に否定的な態度を示すのはどのような人々なのか、ということを明らかにした。特に、調査時期による変化、住居の教団施設からの距離、年齢や学歴などの属性の影響にも注目した。

分析の結果、教団施設が地域にあることによって、真如苑に対する住民の認知度はかなり高くなっていること、「お金がかかる」というイメージがとりわけ強くもたれていること、教団施設については半数以上が否定的であることが明らかとなった。

また、施設建立当初よりも現在のほうが認知度は高くなったこと、現在では居住地の教団施設からの距離はイメージや認知度に影響しなくなっていることが確認された。属性に関しては、特に若年層において宗教教団全般に、「あやしげな」イメージが強くもたれていることが明らかになった。さらに、「あやしげな」イメージをもつことが教団施設への否定的態度を促進させる要因となっていることも分かった。

地域住民と教団が良好な関係を築くためには、宗教教団全体の信頼回復、特に若年層における宗教への不信感が除去されるような方向へ、現代日本社会が向かうことが不可欠であるだろう。

キーワード

イメージ／認知／教団施設／真如苑／比較

1　序論

1・1　問題の所在

本論では、これまで宗教研究の対象として注目されることの少なかった、日本人の宗教教団に対するイメージや態度を取り上げる。

現在に至るまで、日本でも多くの宗教調査がなされてきたが、それらの多くは教団信者を対象としたものや、世論調査の形をとって日本人の潜在的な宗教意識および慣習的な宗教行動をさぐるものであった。しかし、一般的に、多くの日本人が、それほど宗教的とはいえないのもまた事実である。例えば、一九九八年に実施された統計数理研究所の「国民性」調査（第十次）では、「何か信仰を持っている」と回答したのは、29%にとどまっている（統計数理研究所1999）。つまり、日本人の7割くらいは、宗教を自分自身の問題としてよりも、「他者」の問題として捉える、という傍観者的な態度で見ているのではないだろうか。

だとすれば、人々の宗教教団に対するイメージや態度に焦点を当てた、「宗教に対する意識」の調査がもっと行なわれてしかるべきだろう。本論は、そのような研究の端緒として、地域住民の教団施設をめぐる意識構造を、実証的に明らかにする試みである。

一般的には、日本人は宗教教団に対してネガティブなイメージを強く抱いているとされる（井上 1995）し、それを支持するような調査結果も見られる（石井 1997: 151-153）。とりわけ、伝統宗教でない教団については、より否定的なイメージをともなった評価がなされがちである。したがって、「地域」と「宗教施設」との関係は、地域住民にとっても、教団側にとっても、大きな関心をひく問題となっている。

本論では事例として、新宗教教団の一つである、真如苑を取り上げ、その教団施設周辺での質問紙調査から得られたデータの分析を行なう。それによって、教団施設周辺の住民が、真如苑に対してどのようなイメージを抱いているのか、どのような人々が教団施設に対して否定的な態度を示すのか、といったことを明らかにしたい。

1・2　調査の概要

本論の分析において用いるのは、「「宗教と地域住民の相互関係」に関するアンケート調査」（一九九三年十月）および「「地域における施設と住民の相互関係」に関するアンケート調査」（二〇〇一年二月および五月）である[1]。この二つの調査はいずれも高槻市にある真如苑教団施設周辺の地域住民を対象として実施されている。調査対象地域にある教団施設は一九九三年三月に落慶した悠音精舎と呼ばれるものであり、真如苑の西日本における中心的施設である。93年調査は教団施設建立直後の調査、01年調査は、建立から八年を経過した時点での調査である。

二回の調査とも、調査対象者は、二十歳から五九歳までの男女である。サンプリングは、選挙人名簿を基にしたものではなく、エリア・ランダム・サンプリングの手法を取った。サンプリングでは、

調査地区によって年齢、性別に偏りが出ないよう配慮した[2]。

93年調査においては、高槻市内ではあるが、施設周辺とはいえない地域も、比較のために調査対象地域として含まれている。93年調査のデータサンプルは508である。内訳は施設隣接地域86、周辺地域141、周辺外地域281となっている。01年調査のデータサンプルは349である。内訳は、施設隣接地域184、施設周辺地域161である。施設隣接地域は、教団施設の所在地に隣接する地区であり、周辺地域は、それよりは遠い距離にある地区である。ここには、最寄り駅から教団施設までのルートとなりうる地区が多く含まれている。また、二つの調査の地域区分は、比較のために、同一となるように設定してある。

本論では、このように時期の異なる二つの調査を用い、かつ、教団施設からの距離によって地域を区分することによって、それらと教団へのイメージや教団施設への態度とのあいだにどのような関連があるのか、ということにも重点を置いている。

1・3　分析に用いる項目

分析に用いる項目は以下のとおりである。

・社会的属性：性別・年齢・学歴および教育年数[3]・居住地域

・教団認知（真如苑を含めた十六の宗教教団について、知っているかどうかを質問した。）

・教団イメージ（上記の質問で「知っている」と回答した場合には、十二のイメージから該当するものをいくつでも選択してもらった。具体的に取り上げたイメージと教団は以下の通りである。）

教団：創価学会、統一教会、エホバの証人、真如苑、天理教、浄土真宗、幸福の科学、カトリック、PL教団、真言宗、禅宗、プロテスタント、阿含宗、立正佼成会、神道、霊友会

イメージ：「明るい」「好感が持てる」「布教熱心な」「視野が広い」「規模が大きい」「閉鎖的な」「あやしげな」「お金がかかる」「常識はずれな」「神秘的な」「親しみやすい」「社会と関わっている」

・教団施設への否定的態度

「地元に宗教法人があるのは何となくいやだ」「いろいろな人が集まるので、交通・通行の迷惑となる」「地域に対する活動を十分に行なっていればよい」（逆転項目）

本論で中心となるのは、教団認知とイメージである。これまでも、人々の宗教に対する意識が調査項目となることがあったが、その多くは、「宗教教団」についてどう思うか、というような、さまざまな教団を一括りにして質問するようなものであった。しかし、日本は種々雑多な宗教が混在する国であり、伝統宗教から、新新宗教まで、その特徴にもかなりの幅が見られる。したがって、それらに対する人々のイメージも多様であって当然であろう。本調査では、個別の教団それぞれについてイメージをたずねるという、より実情に即し

た形式を採用した。このような質問項目を用いているという点は、本調査の特色の一つであろう。ただし、本論は真如苑に対しての人々の意識をさぐるのが目的なので、他の教団については、比較の対象として必要に応じて示すにとどめておく。また、教団施設への否定的態度は、いずれも「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」の四件法で質問している。分析の際には、これらを主成分分析によって合成したうえで用いることにする。

1・4　分析課題

本論での分析課題を以下に整理しておく。

第一は、そもそも真如苑が、地域住民にどの程度認知されているのか、という問題である。真如苑は、新宗教のなかでは比較的規模が大きい教団であるとはいえ、それほど広く認知されている教団ではないだろう。しかし、自らの居住地域内に教団施設を抱える住民にとっては身近な存在であり、より多くの人々が認知するようになる、ということは当然ありえるだろう。また、その認知度も、教団施設建立直後と現在では異なるだろうし、施設からの距離によっても違ってくると考えられる。さらに、性別や年齢といった回答者の社会的属性とも何らかの関連があるかもしれない。したがって本論では、調査対象地域での真如苑の認知度について、他教団との比較、調査時期による変化、施設との距離による違い、属性による違い、という四つの観点から分析を行なう。

第二は、真如苑を認知している人々はどのようなイメージをもっているのか、という問題である。日本においては、宗教教団全体が概して否定的なイメージにおいて受け止められがちである。住民にとって近隣に存在する真如苑は、他教団と比較して、どのような相違点があるのか、またどのような教団と類似するものとして受け止められているのか。施設建立直後と現在では変化が見られるのか、施設からの距離によってはどうか。そして、属性による違いはあるのだろうか。イメージに関しても、認知度と同じ四つの観点から分析を行なうことにする。

第三は、真如苑の教団施設について否定的な態度を示すのはどのような人々か、という問題である。この点に関しては、93年調査において質問項目が設けられていないため、調査時期による変化を分析することはできない。したがって、施設からの距離と属性によって違いが生じているのか、分析課題のふたつめとして取り上げる、教団イメージと否定的態度とのあいだにはどのような関連があるのか、という点について分析を行なう。

以下、三つの課題にそれぞれ一節ずつを割り当て、分析を通した検証を行ない、そこから浮かび上がる地域住民の意識構造を、第五節において整理しつつ、それに基づいた議論を展開させる。

2　真如苑の認知度

2・1　他教団との比較

教団施設周辺の住民は、真如苑をどれほど認知しているのだろう

か。01年調査データをもとに、他教団と比較したのが表1である。調査対象地域における傾向と一般的な傾向との相違を見るために、同じく教団ごとの認知度を調査した全国調査の結果と公称の信者数とをあわせて示している。なお全国調査は、研究プロジェクト「日本人の宗教意識と行動」（代表者：阿部美哉）により、一九九九年に実施されたものである。

表1から分かるように、真如苑の認知度が、もっとも一般的な傾向から乖離している。全国調査では12.6%でしかない認知度が、本調査では、86.7%と非常に高い数値になっているのである。その数値は、統一教会、エホバの証人、天理教といった、全国的に知名度の高い教団にも引けを取らない。やはり、この地域において、教団施設の存在が、真如苑の認知に大きく関与しているのは明らかである。

93年調査では、「知っている」と回答した人々に、その認知媒体についてたずねている。表1での数値は01年調査のものであるが、参考までにあわせて示しておいた。そこから明らかなように、すべての宗教教団について主な認知媒体として、マス・メディアが一定の関与をしている。教団イメージに対するマス・メディアの影響力の大きさは、しばしば言及されるところのものである（井上 1996）が、それは認知の段階においても影響しているのである。

また、マス・メディアの影響力の大きさは、信者数と認知度が単純な対応関係にないということからもうかがわれる。ふつう、教団が抱える信者数が多いほど、その教団の認知度は高くなるというの

表1 教団認知度と信者数、主たる認知媒体

	高槻調査	全国調査	信者数	主たる認知媒体
統一教会	88.7	65.5	*40万	マスコミ
エホバの証人	87.2	56.5	*22万	信者、マスコミ、友人・知人
真如苑	**86.7**	**12.6**	**79万**	**施設、友人・知人、マスコミ**
天理教	86.1	88.6	182万	マスコミ、信者、友人・知人
幸福の科学	79.1	56.1	*1000万以上	マスコミ
ＰＬ教団	74.5	66.5	113万	マスコミ、施設
阿含宗	41.4		31万	マスコミ
立正佼成会	40.0	61.3	586万	マスコミ、信者、友人・知人
霊友会	32.5	34.6	175万	マスコミ

*認知度は%で示している。
*全国調査は、研究プロジェクト「日本人の宗教意識と行動」（代表者：阿部美哉）により1999年に実施されたものである。結果は、新宗教新聞のホームページから引用した。
（http://www.shinshukyo.com/press/press876.html）
*信者数は、宗教年鑑（平成12年度版）から抜粋した。*印については島薗進『ポストモダンの新宗教』(p.10-11)より抜粋した。

が、常識的な見方である。ところが、統一教会、エホバの証人は、信者数が少ないにもかかわらず、認知度がかなり高い。これらは、マス・メディアによって取り上げられた話題性のある教団であるがゆえに、多くの人々に認知されていると考えられるのである。

一方の真如苑については、マス・メディアに取り上げられる頻度は少ない。しかし、「実際に施設を見たことで知った」という回答が多いことからも、調査対象地域に教団施設が存在するということが、かなり大きく影響しているといえるだろう。

2・2　調査時期による変化と教団施設との距離による相違

01年調査時点において、地域住民の真如苑に対する認知度はかなり高いということが分かったが、それは調査時期や施設との距離によってどの程度異なるのであろうか。表2に、一節での区分にもとづいた認知度を示している。

結果を見ると、やはり教団施設からの距離が近いほうが、また、現在のほうが認知度は高いということが分かる。93年調査では、隣接地域が89.5%、周辺地域が68.8%であるのに対し、周辺外地域は32.7%とかなり低くなっている。ここからもやはり、教団施設の存在が、真如苑の認知度を高めているということがあらためて確認された。

さらに、調査時期による変化を見ると、周辺地域における認知度が高くなったことが分かる。93年調査では、隣接地域と周辺地域との差は20%程度の開きがあったのであるが、01年調査では、その差

表2 認知度（施設からの距離と調査時期）

認知度	93年	N	01年	N
隣接	89.5	(86)	89.1	(184)
周辺	68.8	(141)	83.9	(161)
計	76.7	(227)	86.7	(345)
周辺外	32.7	(281)		

*数値は%で示している。

*93年のみχ二乗検定で1%水準で有意。

表3 真如苑の認知度の変化と属性

性別	年齢	学歴	1993年		2001年
男性	若年層	初・中等	81.8 (22)		90.0 (31)
		高等	**77.4** (31)		**77.6** (49)
	高年層	初・中等	**64.0** (25)	<	82.9 (35)
		高等	92.6 (27)		86.8 (38)
女性	若年層	初・中等	**62.5** (24)	<	92.0 (25)
		高等	**66.7** (42)	<	89.2 (65)
	高年層	初・中等	92.6 (27)		89.1 (55)
		高等	81.0 (21)		88.9 (36)
計			76.7 (219)		86.7 (334)

*数値は%、括弧内は有効回答者数を示している。

*サンプルは隣接・周辺地域のみ。

*年齢は20～30代を「若年層」、40～50代を「高年層」としている。学歴は高卒までを「初・中等」、それ以上を「高等」としている。

はほぼ解消されている。隣接地域に関しては、調査時期による変化は見られない。つまり、隣接地域では、施設建立当初から、住民のほとんどがその存在を認知しており、そこからやや離れた周辺地域では、徐々に認知度が高くなっていったと解釈できる。ちなみに、他の教団では、93年から01年にかけて、認知度が高くなったものはなかった。

2・3 属性による相違

01年調査にいたっては、大多数の人々が真如苑を認知するようになったことを確認した。それでは、早い時期から真如苑を知っていた人と、後になって知るようになった人との間には、属性による違いは見られるのであろうか。表3には、調査時期による変化と併せて、性別、年齢、学歴という三つの属性にもとづき、8グループに分けた認知度を示している。

大まかに言って、高年層のほうが以前から、真如苑を認知していたことが分かる。女性の若年層、男性の高年層かつ初・中等学歴の層は、93年調査時点では、6割程度の認知にとどまっていたが、01年調査では、かなり認知度が高くなっている。一方で、男性の若年層かつ高学歴層では、93年調査で77.4%、01年調査でも77.6%とほとんど変化しておらず、しかも認知度が相対的に低くなっている。

おそらく、地域にある教団を認知しているかどうかということは、地域にまつわる情報にどれほど精通しているか、どれほど関心があるか、ということに左右されるものであろう。今回の結果は、どの

層が情報に先んじているのか、どの層が地域への関心が薄いかの一端を示したものと見ることもできよう。

3　真如苑のイメージ

3・1　他教団との比較

続いて、地域住民の真如苑イメージについて検討する。まず、他教団との比較から、真如苑がいだかれているイメージを見定めていこう。ここでは、図上に表現する二通りの手法を用いる。結果が煩雑になるのを避けるため、01年調査のみを用いることにする。

まず、図1はコレスポンデンス分析[4]を行なった結果である。コレスポンデンス分析とは、クロス集計表を使って、行の要素と列の要素の相関関係が最大になるように数量化して、その行の要素と列の要素を多次元空間（散布図）に表現するものである。プロットされた点の距離が関係の強さを表しているため、どのような教団が類似するイメージをもたれているのか、それぞれの教団に特徴的なイメージはどのようなものなのかを、視覚的に確認することが可能である。

今回の分析では認知度が高い七教団に限定した。なぜなら、そもそも宗教教団を認知していないサンプルは欠損値として扱わざるを得ないからである。イメージについても、回答者が多く選択した順に八つのイメージを取り上げた。

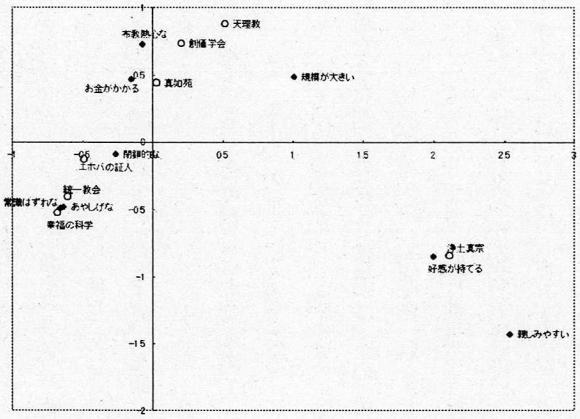
図1から明らかなのは、七つの宗教教団が大きく三つのクラスターに分類されるということである。ひとつめは右下にプロットされた浄土真宗およびその特徴的なイメージである。「好感が持てる」「親しみやすい」というイメージが、非常に近い位置にあることから、浄土真宗は概して肯定的なイメージをもたれているということが分かる。逆に「あやしげな」「常識はずれな」「閉鎖的な」などの近くにプロットされているのは、幸福の科学、統一教会、エホバの証人といった新新宗教に分類されることが多い教団である。これらは他教団と比較して非常に否定的なイメージをもたれているということが分かる。

もうひとつのクラスターは新宗教に分類される創価学会、天理教、そして真如苑である。これらに付随するイメージは「布教熱心な」「お金がかかる」である。やや距離を置いて「規模が大きい」というイメージもプロットされている。このように、位置関係から見ると、真如苑は創価学会や天理教といった新宗教に近いものとイメージされているようである。

次に、それぞれのイメージが、どの程度の割合でもたれているのかをレーダーチャートによって確認する。図2から図4までに、先の三つのクラスターに対応する七教団を示してある[5]。左側が否定的なイメージ、右側が肯定的なイメージとなっている。

まず、図2の浄土真宗では、「規模が大きい」というイメージが強く、かつ、肯定的なイメージのほうに偏っている。しかし、「規模が大きい」を除くと、肯定的なイメージで捉えているのはせいぜい1、2割程度であり、大部分の人々は、特に何らかのイメージを抱くま

図1 教団イメージの分布



01年　N=196

表4 真如苑イメージ(01年調査)

明るい	4.3
好感が持てる	2.9
親しみやすい	2.5
社会と関わっている	9.7
視野が広い	1.4
神秘的な	4.3
規模が大きい	22.9
布教熱心な	15.4
閉鎖的な	11.1
あやしげな	27.2
お金がかかる	38.0
常識はずれな	7.5
有効回答者数	279

数値は%、隣接・周辺地域のみ。

図2 レーダーチャート(仏教)

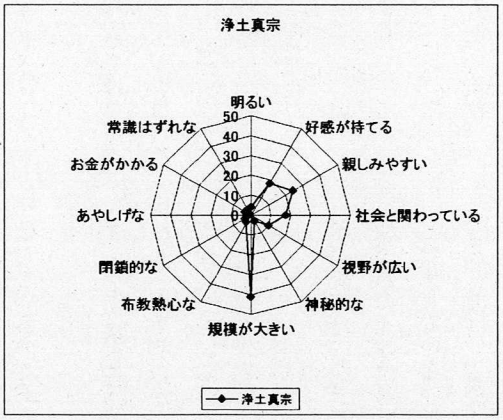


図3 レーダーチャート(新新宗教)

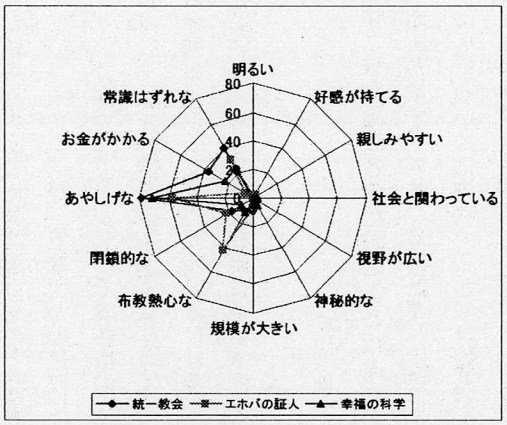
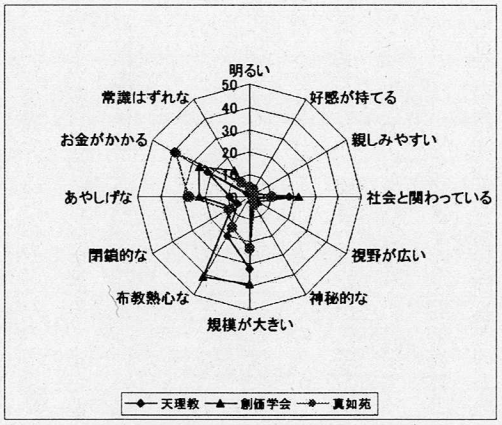


図4 レーダーチャート(新宗教)



での関心は示さないようである。

その逆の傾向があった統一教会などの新新宗教教団について図3に示しているが、その分布から明らかなように、浄土真宗とは対照的なイメージが抱かれている。まず、左側の肯定的イメージがまったく存在していない。逆に、多くの人が「あやしげな」イメージがあると答えている。その割合は非常に高く、統一教会78.2%、幸福の科学71.3%、エホバの証人57.0%である。それ以外の否定的イメージにおいても、これらの教団は、他と比べて高い割合となっている。

真如苑を含む図4の新宗教教団は、先の新新宗教教団ほどではないにせよ、一見してイメージが左側、つまり否定的なイメージのほうに偏っているのが分かる。特に創価学会は「布教熱心」(41.3%)であり、真如苑は「お金がかかる」(38.0%)と見られている。特に、「お金がかかる」に関しては、取り上げた十六教団のなかで真如苑がもっとも高い割合であった。一方で、「社会と関わっている」について、創価学会では22.0%、天理教では17.8%が当てはまるとしている点が特徴的である。

表4には、真如苑について、個別のイメージがいだかれている割合を示している。それを見ると、もっとも高いのがやはり「お金がかかる」の38.0%である。つづいて、「あやしげな」が27.2%、「規模が大きい」が22.9%である。「布教熱心な」が15.4%、「閉鎖的な」が11.1%あり、それ以外のイメージは一割以下となっている。

ここまで個別の宗教教団イメージを比較したが、それぞれにイメージの傾向が大きく異なることが確認された。そのなかで、真如苑は、天理教や創価学会といった新宗教集団と比較的近いものと認識され、特に「お金がかかる」というイメージが、他教団との比較において特徴的であるということが分かった。しかし、その特徴的なイメージすら、4割にも満たないという点は留意すべきであろう。真如苑について認知している地域住民の多くは、教団自体には特にどのようなイメージもいだかないか、もしくは、評価については保留しているのである。

3・2　調査時期による変化と教団施設との距離による相違

3・1で明らかになった真如苑のイメージは、93年調査と比較して変化しているのだろうか。図表については省略するが、真如苑に対するイメージは93年と01年で意外なほどに変化していない。「規模が大きい」というイメージが、93年調査では39.6%だったのが、01年調査では22.9%に減少しているのが目立つくらいである。また他教団との比較においても、その位置関係はまったくといっていいほど変化していない(6)。

それでは、「規模が大きい」というイメージが変化したのはなぜだろうか。さまざまな理由が考えられうるが、施設建立直後には、その施設の大きさゆえに、「規模が大きい」という印象を多くの人がもったのではないだろうか。現在においては、施設の存在が住民のなかに定着したために、そのような印象が薄められたと考えられよう。実際に93年調査での「規模が大きい」というイメージと認知媒体との関連を見ると、「実際に施設を見て」認知したという回答とのあい

だに、.346という高い相関があった。このことからも、01年調査において、「規模が大きい」イメージをもつ人の割合が減少したのは、当初の印象が薄れたためと見るのが妥当であろう。

それ以外の真如苑イメージに変化は見られなかったのであるが、教団施設からの距離を考慮に入れると、一概にそうとも言い切れない部分があることが分かる。それを示したのが表5である。

宗教教団一般に広くいだかれている「あやしげな」イメージであるが、93年調査では、隣接地域で17.1%、周辺地域で34.0%、周辺外地域で36.7%が、真如苑に対してそのようなイメージがあると回答している。この時点では、隣接地域とそれ以外の地域とのあいだに有意な差がある。一方、01年調査では、隣接地域25.0%、周辺地域30.1%と有意な差ではなくなっている。周辺地域ではその割合が減少する一方で、隣接地域では逆に増加しているのである。

表5 施設からの距離による教団イメージの違い

	1993年	N	2001年	N
隣接	17.1	(70)	25.0	(156)
周辺	34.0	(94)	30.1	(123)
周辺外	36.7	(90)		

*「あやしげな」イメージの割合を示している。

*93年のみ、χ二乗検定で1%水準で有意。

これらの結果について解釈する際には、先ほどと同様、93年調査での認知媒体との関連が参考になる。まず、施設からの距離と「マスコミ」による認知とのクロス分析を行なうと、隣接地域の9.1%に対し、周辺地域では21.6%、周辺外地域では34.8%が「マスコミ」によって認知したと回答しており、この差は1%水準で有意である。さらに、「マスコミ」による認知と「あやしげな」イメージとの相関は.213で1%水準で有意な値であった。つまり、「隣接地域でない→「マスコミ」による認知→「あやしげな」イメージ」という流れがあったことがうかがえるのである。

それでは、01年調査において、施設からの距離が意味を持たなくなり、隣接地域において、むしろ「あやしげな」イメージが増加していることは、どのように説明できるだろうか。あくまで推測の域を出ないのであるが、考えられる理由をここで提示しておこう。93年の施設建立直後において、真如苑側は、隣接地域住民の不安を考慮し、地域住民に施設の見学の機会を設けたりするなどの対策を講じていた。それにより、建立当初、住民はそれほど違和感なく受け入れることができたのかもしれない。しかし、大規模な施設ゆえ、法要などの際には、大勢の信者が集うため、交通渋滞等の問題が生じるのはやむを得ない。そのような経験から、住民の一部に不信感が生じたことが、「あやしげな」イメージの増加と関連する部分もあ

るのではないだろうか。

このように、真如苑イメージのある部分は、時期や施設からの距離によって異なることが明らかとなった。

3・3　属性による相違

真如苑に関して、より多くの人々が選択したイメージは、「お金がかかる」であり、次に「あやしげな」であった。それでは、どのような属性の人々がそれらのイメージをいだいているのであろうか。逆にそれらのイメージをいだいていないのは、どのような人々なのであろうか。イメージについて「お金がかかる」「あやしげな」を組み合わせて、「お金がかかる・あやしげな」「お金がかかる」「あやしげな」「イメージなし」の四つに区分し、認知度の場合と同様に、性別、年齢（若年層／高年層）、学歴（初・中等／高等）との関連についてクロス分析を行なった。その結果を表6に示している。

結果は5%水準で有意であり、各セルの調整済み残差もそれほど高くはないが、その微小な差異に注目すると、性別および学歴によって異なった特徴が見出され、興味深い。

まず、女性の「初・中等」層に特徴的なのは、「お金がかかる」が「あやしげ」ではないというイメージを4割程度の人々がもっているということである。一方、女性の「高等」層は、半数以上の人々がどちらのイメージについても選択していないという点に特徴がある。

女性の一部の層に「お金がかかる」というイメージが強くあらわれたことについては、次のような解釈が妥当かもしれない。NHK

表6　真如苑イメージと属性8区分

性別	年齢	学歴	イメージなし	あやしげな	お金がかかる	あやしげ&お金	N
男性	若年層	初・中等	50.0	0.0	29.2	**20.8**	24
		高等	38.2	**23.5**	17.6	**20.6**	34
	高年層	初・中等	46.4	17.9	28.6	7.1	28
		高等	38.7	**29.0**	25.8	6.5	31
女性	若年層	初・中等	30.4	17.4	**39.1**	13.0	23
		高等	**51.9**	19.2	17.3	11.5	52
	高年層	初・中等	42.9	12.2	**42.9**	2.0	49
		高等	**63.3**	10.0	20.0	6.7	30
計			45.8	16.6	27.3	10.3	271

*数値は%を示している。

*調整済み残差が1.0以上のものを太字で示した。

世論調査所による調査では、女性が「現世利益的行動」をより頻繁に行なうことに関して、「男性＝観念的／女性＝現実的」という一般論から、女性が「現世利益的」なものにより接近しているのではないかとの解釈を示している（NHK放送世論調査所編 1984: 62-63）。それを今回の分析結果に当てはめるならば、女性は、教団イメージにおいても、「お金がかかる」という、より現実的なイメージに敏感に反応するという見方も可能である。

女性の「高等」層については、どちらのイメージについても選択しないという人々が相対的に多かった。それは、女性の「初・中等」層が「お金がかかる」イメージをもつということ、男性の「高等」層が、比較的「あやしげな」イメージを強くもつという結果とも異なるものである。教育程度が高い者のほうが、より合理的・科学的思考を身につけており、「非合理な」宗教に対しては批判的であるとする解釈も、一般的な見方としては可能である。しかし、高等教育を受けた女性がそれに当てはまらないということは、どう解釈すべきだろうか。一般的に女性のほうが宗教的であるということが、各種世論調査において確認されている（石井 1997: 90-96）。女性であり、かつ高学歴層であるという属性は、否定的イメージについては留保させるように作用するのかもしれない。

年齢との関連では、若年層の男性が特に、学歴に関わらず「あやしげな」「お金がかかる」イメージの両方を持つ人々が多いという点に特徴がある。両イメージをともにもつのは、全体では10.3%であるのに対し、男性の若年層では20%を超えているのである。

しかし、さらに世代別に細かく見ると、男女を問わず、二〇代において、「あやしげな」という否定的なイメージが、とりわけ強くもたれているということが分かる。表7がその結果である。

男性では、全体で32.0%が「あやしげな」イメージをもっているのに対し、二〇代は51.7%、先ほどまで同じ若年層に含めていた三〇代は、18.8%でしかない。女性では、全体で23.6%が「あやしげな」イメージをもつのに対し、二〇代では41.9%にもなる。他の世代がいずれも10%台であることを考えると、かなりの差である。

ただし、この若い世代が「あやしげな」イメージをもつのは、何も真如苑だけに当てはまるものではないようである。表8に新宗教三教団の「あやしげな」イメージと性別、年齢、教育年数との相関を示した。ここからは年齢と三教団の「あやしげな」イメージとのあいだに、すべて1%水準で有意な相関があることが分かる。若い世

表7 真如苑イメージと世代（属性別）

性別	世代		N
男性	20代	**51.7**	29
	30代	18.8	32
	40代	35.7	28
	50代	24.2	33
合計		32.0	122
女性	20代	**41.9**	43
	30代	17.6	34
	40代	14.7	34
	50代	17.4	46
合計		23.6	157

*「あやしげな」イメージの比率を示している。

代は、新宗教教団全般に対して否定的なイメージを抱いていると推測される。

既存の世論調査では、若年層は宗教に対してマイナスのイメージをもつことが確認されている（NHK放送世論調査所編 1984: 38-39）。今回の結果は、既存の知見と一致するものといえるが、特に二〇代での否定的なイメージの強さが際立っている。オウム真理教事件以後、宗教教団全般のイメージは、より悪化したといわれる。その影響は、特に若い世代において強くあらわれているのかもしれない。

表8 「あやしげな」イメージと属性との相関

	性別	年齢	教育年数
天理教	.015	-.188**	.061
創価学会	-.051	-.162**	.114*
真如苑	-.094	-.190**	.144*

**1%水準で有意　*5%水準で有意

*「あやしげな」イメージは、1=イメージあり、0=イメージなしとしている。

4　教団施設への否定的態度

最後に、どのような人々が教団施設に否定的な態度を示すのかということを分析する。施設への態度については、93年調査では質問を設けていないため、01年調査データのみを用いる。一節で述べたように質問項目「地元に宗教法人があるのは何となくいやだ」、「いろいろな人が集まるので、交通・通行の迷惑となる」、「地域に対する活動を十分に行っていればよい」（逆転項目）を主成分分析によって合成した(7)。ちなみに単純集計では、どの項目についても半数以上が否定的な態度を示すという結果であった(8)。

主成分分析における第一主成分を「教団施設への否定的態度」とし、その主成分得点を分析に用いる。表9において属性およびイメージとの関連をみた結果、「教団施設への否定的態度」と有意な相関があるのは、「あやしげな」イメージだけということが分かった。「あやしげな」イメージをもつ人ほど、「教団施設への否定的態度」は強く、相関係数は-.277であった。

「教団施設への否定的態度」と年齢との相関がみられないのは、これまでの分析から考えるとやや意外である。「教団施設への否定的態度」がより幅広い層に共有されているため、属性による差が出なかったのであろう。

つづいて、「教団施設への否定的態度」を直接的に規定する要因をさぐるために、性別、年齢、教育年数、地域、「あやしげな」イメージを独立変数、「教団施設への否定的態度」を従属変数とした重回帰分析を行なった。その結果を表10に示してある。相関係数と同様に、「あやしげな」イメージのみが有意な直接効果をもっており、標準偏回帰係数は-.280となっている。しかし、決定係数はかなり小さく、.090である。

表10にはまた、「あやしげな」イメージを従属変数とした重回帰分析についての結果も示している。「あやしげな」イメージに直接的な効果があるのは、年齢のみであった。標準偏回帰係数は-.165で、決定係数は.058である。

図5に、二つの重回帰分析の結果をパス図で示した。ここでの結果は、決定係数がかなり小さく、それ以外の要因がさまざまな影響を及ぼしていると考えられる。しかし、今回取り上げた変数間の関連についてのみ見るならば、年齢が低いほど、真如苑に対して「あやしげな」イメージをもつ傾向があり、「あやしげな」イメージをも

表9 相関係数

	「あやしい」	「お金」	教団施設への否定的態度
性別	-.098	-.042	-.025
年齢	**-.173**	.002	.110
教育年数	.146	-.105	.011
地域	.044	.092	.053
「あやしい」		-.028	**-.277**
「お金」			-.030

N=248 リストワイズ　太字は1%水準で有意 下線は5%水準で有意。

*性別は、男性＝1、女性＝2、地域は、施設隣接地域＝1、施設周辺地域＝2としている。

表10 重回帰分析

	「あやしげな」	教団施設への否定的態度
性別	-.086	-.036
年齢	**-.165**	.070
教育年数	.101	.066
地域	.074	.065
「あやしげな」		**-.280**
決定係数	**.058**	**.090**

*N=248 太字は1%水準で有意。

つ人のほうが、教団施設に対しても否定的な態度を示す、という流れがあることが分かった。

5　議論

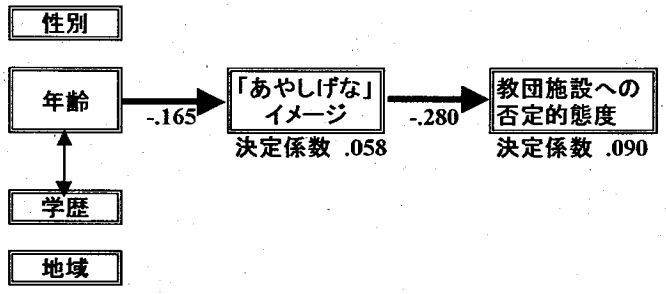
本論では、質問紙調査をもとに真如苑の教団施設住民の意識構造を明らかにした。認知度、イメージ、施設への否定的態度について、他教団との比較、調査時期、施設からの距離、属性による違いに注目しながら分析を行なった。以下、その四つの観点から、分析結果を簡単に整理しておこう。

他教団との比較からは、真如苑教団施設が地域にあることの影響が大きいことが分かった。認知度については、01年調査において、8割以上が「知っている」と回答した。これはかなり知名度の高い教団と同程度の認知度である。また、周辺外地域や全国調査における真如苑の認知度とはかなりの開きがあることから、教団施設が近くにあることによって、人々が教団を知るようになったといえる。

イメージについては、創価学会や天理教などの新宗教教団と比較的近いことが分かった。また、真如苑に特徴的だったのは「お金がかかる」というイメージが強いことであった。

建立直後と現在での変化については、まず、認知度において76.7%から86.7%へと10%の増加があった。逆に、イメージに関しては、「規模が大きい」イメージが、39.6%から22.9%へと減少していた。教団施設が目新しいものではなくなったことによって、イメー

図5　教団施設をめぐる意識構造（パス図）



*数値は標準偏回帰係数。

ジに変化が見られたものと思われる。また、それ以外のイメージについては、ほとんど変化は見られなかった。

しかし、調査時期による変化に、教団施設からの距離もあわせて考慮に入れると、より複雑な変化があったことがうかがわれる。認知度に関しては、隣接地域は建立当初からほとんど変化はなく、認知度が高くなったのは主に周辺地域住民であることが分かった。イメージについては、建立当初は、隣接地域よりも周辺地域住民のほうが「あやしげな」イメージをもっていたが、現在ではその差はなくなっている。教団施設への否定的態度に関しても、隣接地域と周辺地域とのあいだに差は見られなかった。

属性別に見ると、認知度では、高年層のほうが当初から高い傾向にあり、男性の高学歴若年層において、一貫して認知度がやや低い傾向にあることが分かった。イメージに関しては、年齢、学歴によってさまざまに差異化されていることが明らかとなった。「お金がかかる」という真如苑に特徴的なイメージは、「初・中等」学歴の女性がより強くいだいていた。また、「あやしげな」イメージは男性高学歴層および若年層において多くなっていた。二〇代にいたっては、男女問わず、このイメージがとりわけ強くもたれていることが明らかになった。ただし、これは真如苑に限定されるものではなく、新宗教教団全般について、若年層ほど「あやしげな」イメージをもつ傾向にある。

「教団施設への否定的態度」については属性との相関はないが、若年層→「あやしげな」イメージ→「教団施設への否定的態度」という流れが、弱い関連ではありながらも、存在することが分かった。

真如苑は、教団施設建立から八年が経過した現在では、より広い範囲の地域住民に認知されるようになってきている。また、現在では、施設からの距離はイメージに影響しなくなってきており、「規模が大きい」という建立当初の印象もだいぶ薄れてきている。地域住民のあいだに真如苑の存在がかなり定着してきているということができよう。

だからといって、教団施設はそれほど好意的に受け止められているわけではない。「あやしげな」「お金がかかる」といった否定的なイメージは、多数とはいえないが、一定数の人々のあいだにいだかれているし、半数以上の人々が、教団施設の存在には否定的な態度を示している。

それらのイメージや態度を規定する要因として、現段階で比較的大きな影響をもっているのは、年齢である。特に二〇代は、宗教教団全般に「あやしげな」イメージを強くもっていることが示唆された。また、「あやしげな」イメージこそが、施設への否定的な態度を促進する主要因であるということも明らかである。

今後、教団が地域住民と良好な関係を築いていくためには、教団側のたゆまぬ努力もさることながら、宗教教団全体の信頼回復、特に若年層における宗教への不信感が除去されるような方向へ、現代日本社会が向かうことが不可欠であるのは間違いない。

注

(1) 93年の調査は大阪大学教養部社会学教室、01年の調査は大阪大学人間科学部経験社会学研究室によって実施された。

(2) サンプリングの詳細については、01年調査の報告書である、川端亮・吉川徹編『高槻市民の社会とコミュニティに関する意識調査報告書』の「調査対象地の概要と調査の経過」を参照のこと。

(3) 教育年数は、中卒=9、高卒=12、短大・高専卒=14、大学卒以上=16とリコードした。

(4) コレスポンデンス分析については白倉、大隅らの文献を主に参照した（白倉他 1991; 大隅他 1994）。

(5) それ以外の教団の結果については、筆者の先行論文を参照のこと（松谷 2002）。

(6) これらの分析結果については、筆者の先行論文を参照のこと（松谷 2002）。

(7) 主成分分析の結果を以下の表に示す。

(8) これらの質問は「もし宗教団体の施設が地元にあったとした場合～」という仮定での意見を問うものであり、真如苑の教団施設に限定したものではない。しかし、真如苑の認知度が八割以上という地域での調査であることから、回答者の意見に、かなりの程度、真如苑教団施設に対する態度が含み込まれていると考えることも可能であろう。

注7 表　教団施設への否定的態度（主成分分析）

	因子負荷量
地元に宗教法人があるのは何となくいやだ	.839
いろいろな人が集まるので、交通・通行の迷惑となる	.794
地域に対する活動を十分に行っていればよい	.744
寄与率	62.90%

参考文献

文化庁編 2001『宗教年鑑平成十二年版』ぎょうせい

井上順孝 1995「現代日本の宗教イメージ」国際宗教研究所編『宗教教団の現在――若者からの問い』新曜社，3-14

――――1996『新宗教の解読』筑摩書房

石井研士 1997『データブック　現代日本人の宗教――戦後五十年の宗教意識と宗教行動』新曜社

岩渕亜希子・川端亮 2002「調査対象地の概要と調査の経過」川端亮・吉川徹編『高槻市民の社会とコミュニティに関する意識調査報告書』大阪大学大学院人間科学研究科社会環境学講座先進経験社会学・社会データ科学研究分野，1-9

松谷満 2002「地域住民の宗教教団イメージ」川端亮・吉川徹編『高槻市民の社会とコミュニティに関する意識調査報告書』大阪大学大学院人間科学研究科社会環境学講座先進経験社会学・社会データ科学研究分野，198-217

NHK放送世論調査所編 1984『日本人の宗教意識』日本放送出版協会

大隅昇他 1994『記述的多変量解析法』日科技連出版社

島薗進 2001『ポストモダンの新宗教――現代日本の精神状況の底流』東京堂出版

白倉幸男他 1991「対応分析による質的データの解析」白倉幸男編『社会調査とデータ解析』北海道大学文学部社会行動学研究室，65-114

統計数理研究所 1999『国民性の研究 第十次全国調査』統計数理研究所研究リポート83

Structural Consciousness of Inhabitants Who Live Near a Religious Facility "With a Focus on Images of Religious Groups"

MATSUTANI Mitsuru

The purpose of this paper is to clarify structural consciousness of inhabitants who live near a religious facility. Specifically, two surveys conducted to the inhabitants around a facility of *Shinnyo-en* in Takatsuki City are used. How many people know *Shinnyo-en?* What images of *Shinnyo-en* do they have? What kinds of people show negative attitudes to a religious facility? On these questions, influences of attributes, such as age and educational background, change by investigation time, distance from the *Shinnyo-en* facility to inhabited area are points to notice.

The following findings were obtained as results of these analyses.

(1) Most inhabitants who live near *Shinnyo-en* facility know *Shinnyo-en.*

(2) The "costing a lot of money" is characteristic image of *Shinnyo-en* for inhabitants around *Shinnyo-en* facility.

(3) More than half people are negative about a religious facility.

Moreover, people know *Shinnyo-en* more than time which *Shinnyo-en* facility was erected. The distance from the *Shinnyo-en* facility to inhabited area has no effect on image of *Shinnyo-en* and the degree of acknowledgement of *Shinnyo-en* now than it used to be. It is clear that the younger age group strongly has "suspicious" image of new religious group at large. Furthermore it turns out that "suspicious" image of *Shinnyo-en* promotes the negative attitudes to a religious facility.

In order to build a good relation between a religious group and inhabitants who live around, it is required to reduce the distrust to religious groups in Japan.

Key Words

religious facility / *Shinnyo-en* / comparison / image / acknowledgment